

宗教・文化研究所公開講座講演録要旨

院政期の女性と文化・芸能

はじめに

辻 浩 和

院政期には権門体制や荘園公領制の確立に伴って、社会関係が大幅に再編されます。文化面でも院が中心的な役割を果たすようになっていきます。そこで第一章では、文化・芸能の中心としての院はどういう存在かを考えたいと思います。次に、院政の先蹤として近年「女院」という存在に注目が集まっています。では、女院にも文化・芸能の中心としての側面が見られるのでしょうか。第二章では、文化面で院と女院を比較してみたいと思います。

一 院政と文化・芸能／院の求心力を文化面から考える

①文化・芸能に熱中する院たち

・後白河院

後白河院は今様という歌謡に熱中しました。『梁塵秘抄口伝集』巻十によれば、昼は朝から日暮れまで歌い続け、夜は一晩中、歌い明かさない夜はなかった。喉が腫れて水が飲めないような時でも歌い続け、千日間毎日歌い続けたこともあるといいます。天皇・院の立場にある人の行動としては、どうも尋常ではありません。

ただ、実はこういうことをやっていたのは後白河院だけではありません。例えば雅楽の家の藤原孝敏という人は声を改良するために、喉から血が垂れ声が嘎れても半年間大声で歌い続けるといって修行をしました(『文机談』巻四)。侍従大納言藤原成通は今様の名人で、同じ今様を一晩に百回歌う。それを百日間続けています。彼は蹴鞠も千日連続で行いました(『今鏡』「藤波の下」)。堀河天皇も笛の秘曲を千遍吹いたという話があつて(『続古事談』一一一一)、この時期、百とか千の単位で芸能を続けることが修行と見なされたようです。だから後白河院がやっていたことは当時の文脈で言うところなにかおかしなことではないけれども、しかし相当熱心であることには変わりありません。

・後鳥羽院

後鳥羽院はかなり多様な芸能に手を出しました。学問や有職故実はもちろん、漢詩文や和歌・連歌にも熱心で『新古今和歌集』の編纂を主導しました。楽器は笛も琵琶も演奏しますが、特に琵琶では秘曲を許されています。今様に熱中した時期もありますし、自分で白拍子の歌詞を作っています。

残っている手印を見るとこの人は大変体格がよかつたらしい。スポーツマンで色々な武芸に手を出しています。

特に水練が好きで近臣たちと宇治川で泳いだり、泳げない近臣たちを船から突き落として泳がせたりしています。相撲も自分で取るし、自分で競馬に参加して落馬したという記事まであります。「蹴鞠の長者」として蹴鞠の整備発展にも力を入れました。

他の院たちも多かれ少なかれこういう感じで、芸能・文化に熱心に取り組んでいます。ここで問いたいのは、院たちが文化や芸能に、異常とも言えるほどの熱意で取り組んでいるのはなぜかということです。

② 「帝王学」としての文化・芸能

文化面で院たちが褒められている記事を集めてみました。ここから人々が院に期待していたことが分かります。『文机談』という本には「諸道」つまり様々な芸道が盛んになされているかどうかで政治の得失が分かると書かれています。実際、院たちは諸道を興隆したことをもって讃えられます。例えば『沙石集』には「後鳥羽院は末代の賢主明王で、諸道を興隆した」とあります（巻六一十）、『源家長日記』には「あらゆる芸道で御遊が行われた後鳥羽院はどの道においても人に劣らず、いつの間に学ばれたのかと不思議に見えた。色々の芸道を学んでいた人々が、それをきっかけとして立身した」と書いてあります。『読経口伝明鏡集』には「後白河院は讓位の後、あらゆる諸道の絶えたものを継ぎ、うち捨てられたものを興隆されたので、芸能にかかわる人々で、その芸を磨かない者はなかった」とあります。

これらの史料には共通したことが書かれています。すなわち、帝王としての院には諸道を実践・興隆することが求められた。諸道を興隆すると、臣下はそれぞれの芸を活かして昇進・活躍するチャンスが与えられるので、貴族・官人の「家」（家業）を保護することにつながるということです（拙著『中世の〈遊女〉』）。

③院と貴族・官人たちとの関係

今度は貴族・官人たちの側から見ていきます。院政期には、院や有力貴族たちが各種芸能に優れた者を恒常的に召し抱えるようになります。芸能が主従関係を構築するきっかけ、貴族社会で生き抜くための有力な武器となっていくわけです（野田有紀子「平安貴族の招待状」）。

例えば花園左大臣源有仁は芸能に堪能な近臣たちを大勢集めていましたが、初めて有仁のもとに参仕する人が、提出する名簿に「私の能は歌詠みです」と書いたという話があります（『古今著聞集』巻五―一九〇）。有仁の家に仕える者は、どんな芸能ができるのが重視されたのでしょうか。

芸能によって上位の人と交流し、立身出世を図る動きは様々な階層で起こります。天皇・院が芸能を保護するのは、そういう動きの最も上位に位置付けられます。

例えば藤原定家の息子に為家という人がいますが、この人は建暦三年に順徳天皇の近臣になると、蹴鞠に熱中して後鳥羽院や順徳天皇から評価されるようになります。彼はその後「後鳥羽院の御説」を受けて蹴鞠の流派「御子左流」を創設し、蹴鞠を御子左家の家業としました。

順徳天皇は『禁秘抄』『近習事』で藤原敦通・藤原宗平・藤原経長の三人を「蹴鞠・管絃の友なり」と書いています。なかでも経長は仮名も書けないのに蹴鞠によって昇殿を許されたと『明月記』建暦三年十一月十四日条にあります。ちょうど順徳天皇が蹴鞠に熱中していた頃に昇殿しているわけです（秋山喜代子「順徳天皇と蹴鞠」）。

同じように、藤原孝経という琵琶の家の人は龜山天皇の琵琶の師範になったことで昇殿を許されました。『文机談』巻四には、琵琶がなかったら昇殿は難しかったと書いてあります。同書には「主君に取立てられて家を興し、家芸を守って立身することは、有難く手厚い朝恩である」という記述もあります（巻一）。

このように芸能で家を興す、立身出世することを望む貴族・官人たちがいて、天皇や院にはそういう期待に込めることが求められていたのではないか。だからこそ、彼らは文化とか芸能に熱心に取り組んだのではないかと考えられます。恐らく、院の側には臣下の要求に応えることで求心力を高めるといふもろろみがあったのでしよう。

④新興芸能への対応く文化的ネットワークの射程

院政期には今様・蹴鞠などの新しい芸能が流行しますが、これらはもともと下層身分者の芸能です。貴族・官人たちの中には、こういう新しい芸能に積極的にとりくんで芸能者たちと人脈を築き、その人脈を自らの社会関係構築に利用する者たちが出現しました。私はこういう人々を「媒介者」と呼んでいます（前掲拙著）。

例えば、藤原伊通は一時期、神崎の遊女「かね」の所に住んでいました。彼はその人脈を活かして「かね」を自らの仕える待賢門院に紹介しています。彼はまた今様うたいの「姫牛」も寵愛しました。

藤原忠実の家司けしであった藤原盛実や藤原仲実は、地方に下向する際それぞれ「和歌」「戸々とと」という遊女・傀儡くぐ子を同伴しました。彼らは忠実が遊女・傀儡子を召す際の窓口として動いていたといわれています（植木朝子「歌い女の主たち」）。

源清経は妻や養女に歌の上手い傀儡子を迎えた人です。清経は藤原敦家・敦兼や藤原顕季が主催する今様の研究会に妻の「目井めい」を送り込んで歌わせました。また、藤原伊通が抱える姫牛を目井の弟子にして歌を教えさせます。これは多分、伊通から依頼されたのだと思います。このように清経は自分より上位の人と接する際、妻の目井を積極的に使っています。

こうした媒介者の活動は、最終的に院や天皇まで至ります。後白河院は今様を聴くために遊女や傀儡子を頻繁に

召し出しましたが、その際には周りにいる貴族・官人が活躍しました。例えば「初声」は二条院御乳母坊門殿から、「さほのあこ丸」は藤原朝方から紹介してもらいました。今様の師匠である傀儡子「乙前」は、藤原通憲（信西）が乙前の子を召し使っていた縁で連れてきました。

後白河院をはじめとする院たちは、こうした人的ネットワークを介して遊女のような下層身分者、あるいは地方の文化を吸収していきます。文化や芸能は上から下に、都から地方に広がっていくイメージがありますが、院政期の面白いところは、下から、地方から文化をくみ上げていく構造ができていたところだと思います。院たちは、貴族や官人たちが培った人脈を吸収し、ネットワークの頂点に君臨することによって文化の中心たり得ていたのです。

二 女院と文化・芸能と女院と院の関係を文化面から考える

①女院をめぐる

院との対比で、女院について考えてみたいと思います。最近の研究で、撰関期の女院のあり方が院政のお手本だったということが指摘されているからです（高松百香「院政の『お手本』は撰関期の女院だった」）。また、院の代理として政務運営に関わっていた女院の存在も指摘されています（栗山圭子「中世王家の成立と院政」）。女院たちが院政と深く関わっているとすれば、第一章でみたような院の文化的なあり方が女院の場合にも見られるのかどうか。これが第二章で考えてみたいことです。

②女院と文化・芸能

摂関期のサロンは天皇のキサキによるものでしたが、院政期以降は女院や内親王がサロンの主宰者になり、活発な文化活動を展開します。女院文化圏を抜きにしてこの時期の文化を語ることはできません。

画期として重要なのが後白河院の母、待賢門院です。待賢門院の時から女院領として荘園がたくさん作られるようになり、女院たちが経済的な力を持ち始めます。そうすると女院に仕える女房や侍たちも所領を与えられ、経済的な収入を得られるようになります。女院周辺の文化的な活動は、こうした経済力を活かして行われました。女院のもとには代々仕える女房たちがおり、女房の仕事が家業として女系で相伝されてきました。その家業の中には、歌を詠んだり日記を書いたりといった行為も含まれます。こうした文化的な活動とともに、それを経済的に支える所領もまた母から娘に受け継がれました。女房たちにとって女院は、自分たちの「家」を支えてくれる頼もしい存在だったはずで（五味文彦「女院と女房・侍」）。

女房の文化活動を家業として保護していく文化的なパトロンとしての女院像は、院との対比において重要ですが、その後あまり議論が発展していません。ここでは管見の限りで、女院と文化のかかりについて述べます。

・和歌

待賢門院の所には待賢門院堀河をはじめとして、名前の残っている歌人が大勢います。待賢門院の娘、上西門院も多くの女房歌人を抱え、西行などの歌人が出入りする和歌のサロンを主宰しました。

・管絃

待賢門院は「秦箏相承血脈」などから箏が上手だったことがわかります。女房にも少納言局という箏の名人がいました。他の女院についても同様の例を挙げましたが、面白いのは七条院の事例です。彼女は後鳥羽院の母ですが、

一族の二条定輔を後鳥羽院に近侍させ、琵琶の師匠にしています。また琵琶の家の人たち、藤原孝道とその娘たち（讃岐・尾張）を親子ぐるみで抱え、のちに讃岐・尾張を後高倉院に譲っています（『文机談』巻三など）。こういう動きを見ると、七条院は後鳥羽院や後高倉院に対して文化的な媒介者の役を果たしているといえそうです。

・絵画

待賢門院の女房には土佐局と紀伊局という絵が上手な者たちがいて扇紙合の絵などを描いていました。絵が上手な女房は時々見られますが、土佐局は公的な場で障子絵を描いたりする点で珍しい女房です。

このように女院の周辺には、和歌、管絃、絵画などに堪能な人たちが大勢いました。ただし、女房たちとの具体的なかわり方を示す史料はほとんどなく、女房の家業をどうやって保護していたのかはよく分かりません。

③女院と新興芸能

先ほど、院が新興芸能にも関与していたという話をしました。では、女院の場合にはどうでしょうか。

・今様

後白河院が『梁塵秘抄口伝集』巻十に、待賢門院が今様を好んだことを記しています。待賢門院は、神崎の遊女「かね」を自分の女房にして部屋を与えていました。雅仁親王（後白河院）と一日交替で「かね」の今様を聴いたといえます。さつき少し触れましたが、待賢門院はおそらく院司の伊通を介して「かね」を女房にしたのだと思われまます。「かね」は、伊通↓待賢門院↓雅仁親王と人脈をたどって紹介されていたわけですから。

待賢門院の周りには「かね」以外にも今様の名手が大勢いました。例えば家司の藤原長実は、傀儡子を集めて今様の会を開いた顕季の息子です。神崎の遊女「金寿」「目古曾めこそ」との逸話も残っています。藤原成通も今様の名手

で「ささなみ」「初声」という歌うたいを抱えています。藤原敦兼は離婚されかけた時に今様で妻の心を取り戻したというぐらいい歌が上手かった人で「歌談義」という今様の会を主催しました。他にも平忠盛や高階通憲（信西）、待賢門院の兄である藤原通季などに今様や遊女・傀儡子との関係がみられます。こうした待賢門院の今様好きが後白河院に影響したといわれています（小川寿子「後白河院の「今様熱」と待賢門院璋子」）。

待賢門院の娘の上西門院の所には江口の遊女「玉江前」が「半物」として仕えていました（『津守氏古系図』）。建春門院は後白河のキサキとしてしばしば今様の場に同席しました。建春門院の女房が今様を踏まえた装束をわざわざ仕立てているので（『たまきはる』）、建春門院の周辺では今様に親しむ雰囲気があったようです。それから八条院の藏人忠重は傀儡子の息子として今様相承系図に載っており、自身も今様が非常に上手だったようです。鎌倉中期の大宮院は、酒宴の場で後深草院や亀山院に今様・朗詠を歌わせています（『とはすがたり』）。

・白拍子

白拍子とのかかわりで有名なのは、安嘉門院という鎌倉時代の女院です。「正元二年院落書」で「安嘉門院の所ではやたらと白拍子をやつていてけしからん」と批判されました。『増鏡』にも「童舞とか白拍子とか田楽が好きだった」と書いてあるので、実際そういうことをしていたのだろうと思います。

広義門院は、花園院を招いた際、藤原蔭子の知り合いの白拍子女を召して箏を弾かせたり歌を歌わせたりしています（『花園天皇宸記』元亨三年十月五日条）。

・蹴鞠

待賢門院は蹴鞠の会を主催して男性貴族たちに蹴鞠を命じたことが史料に見えます（『蹴鞠口伝集』下）。女性で鞠会、蹴鞠を行った例は四条宮寛子などに見えるけれどもかなり珍しい。後白河院は親王時代から蹴鞠を行って

たことが分かっていますが、今様と同じようにこれも恐らく待賢門院の影響と考えていいと思います。

鎌倉時代の東二条院は、蹴鞠が上手な「新衛門督」という女房を抱えていました（『とはすがたり』巻二）。女性
は普通蹴鞠をしませんので、東二条院の女房だけが蹴鞠に器量の人だったというのは興味を引かれる記述です。

・田楽

田楽は白河院政期に流行します。白河院の娘の郁芳門院という女院は田楽好きで有名でした。鎌倉時代の安嘉門
院も先述の通り田楽が好きで、田楽法師「其駒」の娘である「下野」を下女として抱えています。

このように、新興芸能に関与している女院たちは少なからずいました。ただ男性の院と違うのは、これらの芸能
を自ら実践した例がないことです。その理由はおそらく、当時の貴族女性は人前で顔を見せたり声を聞かせたりで
きず、それをするとはしたないとみられるからです。院政期に流行する芸能には声を出したり動いたりするものが
多いですから、やりたくてもできなかったのだらうと思います。

④女院と院との比較

男性の院に求められていたのは諸道の実践と興隆、そしてそれによって臣下を取り立てて家を保護していくこと
でした。女院について同様の記述をしているのが『駿牛絵詞』です。

室町院は女宮でいらっしやるけれども、牛の善悪をもご存じでいらっしやって、（牛の道を）大変お好みになっ
ているので、室町院中の月卿雲客を始め、貴賤上下は我も我もと牛の沙汰を行う。そのため、牛の逸物も、上
手な牛飼も世に多くあらわれるようになり、（室町院は）この道の中興といえるのです。

今のところ右の一例だけですが、女院の中にも芸道を盛んにしようとする動きがなかったわけではないようです。

しかし全体的に見ると、男性の院に比べて女院は自ら芸能を実践することが少ない。芸能によって臣下を取り立てたという記録もほとんど出てきません。むしろ女院には、院に対して自分の持っている人脈を提供し、院の芸能を支える媒介的な側面が目立つのではないかと思います。

最近、鎌倉時代には多数の女房歌人がいたにもかかわらず女院主催の歌合が見られなくなることで、一方女院のもとの才能を伸ばした女房歌人は天皇・院のもとへ吸収されること、王家サロンの頂点に立つのは院・天皇のみであることが指摘されています（田渕句美子「宮廷歌壇における女性歌人」、山田彩起子「中世前期の女性院宮の女房について」）。女院は、基本的には貴族たちと同じように、自分の持っている人脈を院に紹介する存在だったのでないか、院の芸能を支える存在として女院を捉え返していく必要があるのではないか、というのが結論です。

三 まとめ

院・王家を中心に社会関係が再編される院政期において、文化・芸能をどのように捉えられるかを見てきました。院政期には、芸能を通じて人々がさまざまな社会関係を結び始めますが、そのネットワークは最終的に院に向かう。院は政治だけではなく文化においてもそういうネットワークの中心にいるのではないか、地方や下層から文化を吸い上げる構造があるのではないかという話をしました。

一方で女院は関わる男女に対して文化的な場を提供することはやっているけれども、少なくとも彼らのネットワークを吸い上げるといいう面では院と比較にならない。芸道を興隆して家業を守るといような動きは男性の院のほうが顕著にやっているのではないかと考えました。以上です。

〈キーワード〉

院 女院 新興芸能